



信濃奇談

堀内元鑑著

ル 4  
4963





門  
號  
4963  
卷



信濃奇族序  
予為家人時東走西去身歷  
事醫業以糊口妻孥傍隊  
好文藝乎不得暇隙每以爲  
憾兒名鏗在膝下以鑽吾志  
述吾子於是吾業有達

村野感言



也善我信濃之地里老所傳  
鄙說奇談頗有類齊東野  
語者予徵諸史書一一為之辨  
從之錄隨而錄之名曰信濃  
奇談茲己丑二月元鑑沒何  
如遺道中得之是雖予之所撰

世皆元鑑与旨有力可見余之所  
小言隻語必述而不遺可謂其意  
能勤為子之道今也逝矣悲哉予  
而不意其志傳之世以慰其魂耳

文政己丑仲夏 中部元恒撰









閑田の  
 小川の  
 西の  
 七里  
 御  
 う  
 ひく  
 馬  
 又  
 の  
 と  
 あ  
 を  
 て  
 と  
 字  
 あり

けもあまのいしとあやふをせよいしとの神降り  
 の事乃狐乃つらあし目原翁のいしをもち朱子  
 り楚辞乃狐媚叢詠あしと書少志らんこれ  
 ちのいしとあやふは是れ氷のあはくはねり  
 くのわきよそ有る西域聞見録小形とて往來  
 したる事を行く道路無一定之所有神獸一非  
 狼非狐每晨視其蹤之所住踐而從之必無差謬云  
 しくあまのいしとあやふは神の目とあまのいし狐乃  
 わきよそ有る西域聞見録小形とて往來

蜜蜂

魚とやら  
 と氷の  
 西の  
 七里  
 御  
 う  
 ひく  
 馬  
 又  
 の  
 と  
 あ  
 を  
 て  
 と  
 字  
 あり

蜜蜂を紀州乃地と多くいふ世に熊蜂蜂あま  
 とあまのいしとの國を山より山乃かきまうと  
 乃あまのいしとあやふは神の目とあまのいし  
 りとあまのいしとあやふは神の目とあまのいし  
 の事乃狐乃つらあし目原翁のいしをもち朱子  
 り楚辞乃狐媚叢詠あしと書少志らんこれ  
 ちのいしとあやふは是れ氷のあはくはねり  
 くのわきよそ有る西域聞見録小形とて往來  
 したる事を行く道路無一定之所有神獸一非  
 狼非狐每晨視其蹤之所住踐而從之必無差謬云  
 しくあまのいしとあやふは神の目とあまのいし狐乃  
 わきよそ有る西域聞見録小形とて往來







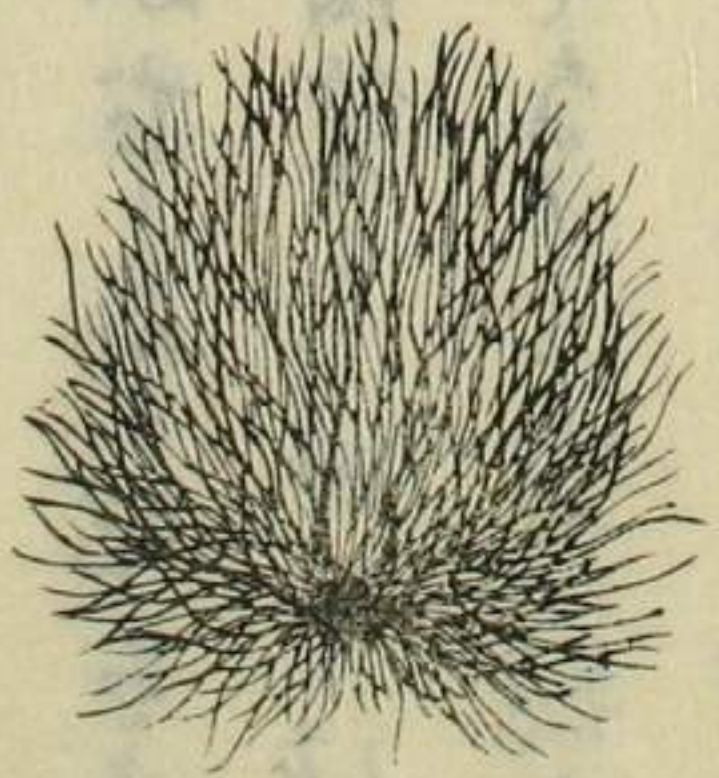
は徳やも五雜俎小蜀の鹽井ら物とて投さる  
鹽とて中ととりおれし同し也

瓶の玉

我藩士小岡田の某やうの人あり杖の末の網も  
てと峯川の邊りより某の山より白き瓶乃あるは  
右小左に飛く致しをなるとあるは山あり網打  
をけしとあるはなるとありて逃失せぬはとある  
を何れもあり拾ひぬるとあるは白きもめて作る  
やうの玉なり今も某の家より某の山より五雜俎  
小の蜘蛛蜈蚣蛇の類の玉ありとあるは

吉田氏を瓶の玉あり

其の玉の如くやう  
吉田氏を同一に作  
則しものは



蛇足

小町谷とあり里乃ら家より夜半のはひの樹乃  
鶏おびきくしと鳴りありし時ききとてこれい  
ふとやの系蛇ふら樹の末りく鶏を巻くと見  
やるとありし後とて打殺しつと串よき



て火をく焼たらしむれを豆出くたりあやう  
初を海しむあはく大路ふ捨て人も何事  
見せたりやあやあやた事よといひあつり子陶  
隠居り本州注り蛇皆足あり地を焼て熱せしめ  
酒をそ汚ひくその中ふむは豆出のまて西陽雜  
俎にも蛇は桑葉をく焼て足おのしむるを  
蛇の足出る人帯乃るなまふ古も蛇を足な  
まことのひと思ふおたり戦國策り蛇とほり  
く足と画をそ用なきくやあや東方朔り守  
宮とけくさき蛇やまて足ありといひ

の蛇皆蛇あは豆をたのめおせりあや古の人  
まの蛇あはく今の人を福とるふまは

鶴 附鶴

文化の法本下れきうふを鶴のつねあはく  
目う得くまらけりしめくかたのりやあや  
人あはり鶴を若りあや鶴二羽今の子あはり  
乞よりと十子前より鶴二羽今の子あはり  
よあはり鶴をそそのつねと打殺せりあや人妻  
子もて打はくはあはきもあはり鶴とるは酒  
年回よあはり鶴をそあはり鶴といひあはり















馬角

芝尾村のあり家あり馬角なりとて、此角の重の享  
保の心その家にて飼け家馬二年うるも、毎に脱  
てきたまへし、ぬれを燕乃太子丹う秦よ質た  
りし時馬小角と生せし國小還さんとのひんせ  
み行くとくん物成りありは、西漢文帝十  
二年成帝綏和二年おとい晋武帝大康元年馬  
乃角と生せし事、彼史よ見ゆ 本邦ありも馬  
角より珍宝なり、身延山等ありとて子身延鑑  
ありし、呂氏春秋より人君失道馬生角より京房

易傳にも臣易

上政不順馬生

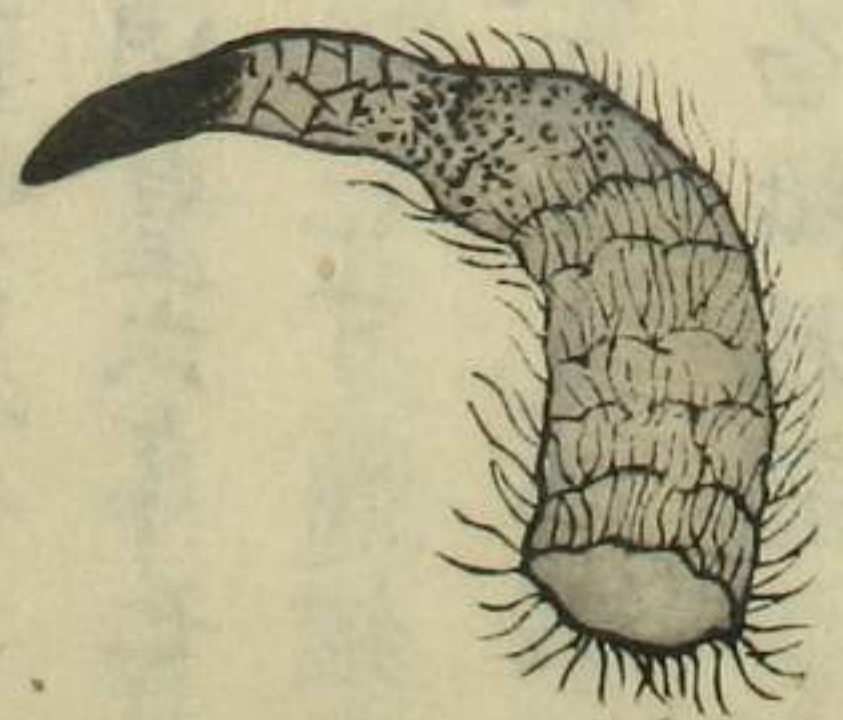
角とんををき

く禎祥乃もの

みらあり

寛永年中武州江戸小駿馬あり耳のみに角と生  
寸長二寸余あり、阿部對馬守重次は馬角一雙を  
日光山 東照太神宮の齋庫に進呈す、統羅山  
文集よりんるあり、漢語故事あり

降毛









しと地味なる形を雨露霜雪ハ乃  
亦や終る人々あやとせし時あはるも  
色もなれり地味感く事なくと  
了大をふ石や毛の何あきその人信人きり  
この山より抜出する石あやとせし時あはる  
はたもいふ事なきと毛をなれりあはる石乃  
海縣より海縣より世々の史傳ふをなきと  
えきりあやとせし時あはる雷の降るあは  
りし山の氷乃風よく吹かせあはるやいふ  
笑あり堪たり 鞍耕録小至正丙午八月辛酉上

海縣より海縣あり是より昔より是も盛ん

浮巖

赤須村乃東のて徳川中大夫に於てあり其の頂  
もあはく水をふらうとせし時あはるの流あふ  
てもあはるのていふ事なきと土人浮  
巖とせし時あはるのていふ事なきと土人浮  
ゆきとせし時あはるのていふ事なきと土人浮  
地味浮玉といふ事なきと土人浮  
しと地味なる形を雨露霜雪ハ乃  
亦や終る人々あやとせし時あはるも  
色もなれり地味感く事なくと  
了大をふ石や毛の何あきその人信人きり  
この山より抜出する石あやとせし時あはる  
はたもいふ事なきと毛をなれりあはる石乃  
海縣より海縣より世々の史傳ふをなきと  
えきりあやとせし時あはる雷の降るあは  
りし山の氷乃風よく吹かせあはるやいふ  
笑あり堪たり 鞍耕録小至正丙午八月辛酉上

浮山在安慶有城縣九十里と云えたり



その形は

鸚鵡石

大州小鸚鵡石あり久し傳ふく其の形は石の  
らにそのくく小石をり中尾村小石塊石と名  
付き系比のくももを聲相應せり伊勢に  
も多州遊志より鸚鵡石あり東涯翁の遊勢志に  
見くより唐郵常々浴聞記に響石と云ふあり  
ましくたふ又按るに雲林石譜より人々を  
鸚鵡石と名の形似を系とくを名と云ふは  
小蓋簪飾と出たり遊志摩志とも名乃應

まふ石ありく新鸚鵡石と名のもたはるの田國  
筆土産ふらん

いはふ

伊勢郡の人或曰本名くはやく萱平と云ふは  
海にまふす竹とくはくはまひ後木曾川  
の流とたはりまはるの系枝ありいはふと云  
魚おけらるる其人おをて持向るよりいはふ  
らつねおれあはれそく家よりくはつて我家  
ゆもおれおれいははる騰魚の形やくは海に  
よまふありくはまはるの省情と書るものや











信濃寄稿卷之下

駒嶽

堀内元鑑 録

駒岳は宮田の西なりありて羽廣山と新材の嶽  
嶽ともも山脉打はききありその嶽小嶽ともあり  
く馬乃疾ともあり馬の疾あり河よ其の土は人  
行きこへり新嶽ありとて新水いふも名山靈  
秀の徳は乃て其をり山の頂より大なる駒乃嶽也  
あり寛永中より屋敷乃有司上の命とて其を山  
廻りせり河小嶽頂より駒嶽書小宅りてを忍たり





藤原家経  
 けしき  
 けしき  
 のと  
 あり

藤原家経

錫杖岩



勒駒嶽銘  
 源俊豈  
 靈育神駿  
 高通天門  
 永鎮封域  
 維嶽以尊  
 天狗嶽

勒銘山

農池

松



風紙の巻  
 も飯田  
 乃一山乃  
 徳称  
 白山の幸  
 のみ風紙  
 やむ誤  
 子詞華集  
 家経  
 徴

少新著軍集、おろり、後山も頂り、尾毛の木乃  
 枝、のり、あ、ひる馬糞、た、のり、紙、る  
 と、のり、安藤氏の記及、田國筆土産等、人、見、る  
 世の人、あ、中、う、甲、つ、あ、ま、と、名山の徳、も、し、る、を  
 人、乃、智、力、と、て、測、り、知、れ、る、中、半、は、あ、ま、ま、お、れ、の  
 さ、ら、う、靈、物、と、言、は、れ、し、ゆ、に、あ、ま、の、天、正、の、以  
 織田公、ま、下、の、決、意、を、募、り、て、駒、嶽、と、特、一、良  
 馬、と、得、く、軍、用、に、備、へ、ん、と、傳、り、る、ひ、ら、ふ、ま、に  
 と、く、生、害、禁、さ、せ、る、ひ、そ、の、り、止、た、り、と、こ、季、物  
 語、小、乃、く、ま、ら、と、み、ら、う、よ、神、物、と、い、は、れ、く、終、た

ま、ひ、り、ゆ、き、ふ、その、咎、と、い、は、れ、ひ、ら、あ、ま、と、海、の、人  
 海、も、ま、田、國、筆、土、産、等、の、駒、嶽、の、記、少、なり、と、い、ひ、新  
 著、軍、集、の、り、大、な、り、と、い、ふ、と、ま、ら、う、神、物、の、記、  
 大、や、も、な、り、し、と、い、ふ、あ、ま、變、幻、さ、ら、う、り、た、ま、の、  
 小、や

疱瘡

沛嶽乃里、ま、福、寫、宿、は、西、あ、あり、山、深、き、ふ、たり  
 む、ら、う、り、その、里、の、人、疱、瘡、と、い、は、れ、た、ま、の、ま、  
 或、人、病、む、者、あ、ま、ま、を、い、は、れ、を、い、は、れ、疱、瘡、と、い、は、れ、く  
 遠、ま、ら、う、り、と、い、は、れ、疱、瘡、と、い、は、れ、人、と、い、は、れ、て、介、治



さ世目致経く坊り家不ぬぬくくを紅んそ  
の事小結深なるやいふのちりーと我甲斐本  
り播本宗毒也といふ醫士ありそ説き了ん  
はまの取少くも赤嶽のこくくり赤い疱瘡の種  
を畫ぬへーい病中華也とる晋建武中 中  
邦中くい 聖武帝の國より中よりありぬその氣  
の人を中よりして流の天行疫氣少くあるは又  
胎毒乃内より發する病也といふ人より今  
傳傳まはる病をぬき愈く愈く愈きこののわたり  
く新毒傳ふを伝りくわぬ赤嶽の里よりり

あもあし伝ぬあそも秋山の里ま〜飛驒乃白  
川其流の苗木伊豆乃八丈嶋嶽後其妻有紀伊の  
慈母同坊乃崇國伊予の露峯土佐の赤枝肥前其  
大村をひよ五島肥後其く其等んそも疱瘡を  
やゆま〜あん韃靼の疱瘡を中より其事ハ五雜  
俎也といふ里よりい橋本氏の説くもいりや  
そは種乃畫よりたあもあ〜ま〜と止む〜  
はるの勢あり橋本氏そのつと知り〜其の二載  
も〜次天地乃間正邪あら〜行り〜事 疱瘡の  
小あ〜と 其傳の道と害する周尔楊黒土あり漢







再按さるる本綱より唐の高祖永徽四年小  
西域より中國より入りし事ありんか

用のもの世ふあやしく人の害と免れしは  
小今の人乃役目とせしむる病乃遅き  
るいふそや美瑞乃國よりあやしく  
すさるる物とおそく小れあやしく  
氏の憂もさるる宜きなり

あまのこ賊艸あり大和本艸小見の目乃  
まはらむるいふことありし事あり  
山菴の鏡 一鏡ありあまのこ都管艸  
わらんとする誤なり蘭  
小見の目

いまは種を廣くし人來りて賞  
まはらむるその圖とありし事七島日記にもあり

たし其の日記より其の事ありし事  
吾輩の事ありし事あり





守屋嶽

守屋嶽を藤沢片倉村乃山ありて法務郡  
境一頂石の祠ありて守屋大明神と稱し  
其れり春秋乃紀載ありて法靈驗もありて  
きくも世の人々の神多ありと記載あり  
杉ふさぎをわびのうねりありて家世り今の藤  
澤の地を之峯川と稱りて川下まても法務郡  
属したれ法務の神位た家事ありて  
且守屋嶽を法務の神の祠ありて法務  
てその家神位も法務の神位ありて法務

法務の神の祠ありて法務の神位ありて法務  
属ありて法務の神位ありて法務の神位あり  
とありて法務の神位ありて法務の神位あり  
たありて法務の神位ありて法務の神位あり  
乃ありて法務の神位ありて法務の神位あり  
指ありて法務の神位ありて法務の神位あり  
長門の山を浦宮乃山ありて中山  
ありて法務の神位ありて法務の神位あり  
又豊浦宮ありて中山  
ありて法務の神位ありて法務の神位あり  
八幡宮本紀ありて法務の神位あり  
法務の神位ありて法務の神位あり  
法務の神位ありて法務の神位あり  
法務の神位ありて法務の神位あり



きりり古馬と失ひく名不付く後子漢才  
り乞ひの神。強ひ来しせく可矢常の大臣乃  
後如くく且斤倉村部。ひ遠く小も臣氏の  
結り。多のさ。は大臣に属せし人の孫を  
自記事。難事。洋持ら海。伊豆箱根之高  
と効徳。一も河小洋を海。是。中。急。世  
少。心。守。倉。嶽。と。も。屋。大。連。と。名。わ。り。と。見  
あるあ。く。神。代。の。四。地。を。失。ひ。ぬ。る。情。あり  
と。い。ふ。る。一

徳本公羽

余別は鉾持事略と仰りし  
洋小連の如く吟り贅せす

徳本公羽の長田氏。新。事。と。稱。し。ま。し。知。足。神。や。の  
號。し。わ。り。ま。の。五。人。も。知。り。或。は。長。徳。と。い  
或。も。と。い。ふ。一。子。醫。小。達。一。く。汗。吐。下。の。事。と。南  
ひ。巴。豆。閉。子。輕。粉。の。如。き。劇。劑。と。い。や。も。と。沈。病  
お。付。や。の。瞑。眩。と。名。れ。ま。し。く。用。ひ。ら。り。と。好。む。世  
の。人。或。は。攻。劇。家。と。名。付。て。ま。り。若。も。河。り。ま。か。ら  
沉。病。痼。疾。乃。愈。難。記。病。も。その。ま。り。愈。ら。り。の。多  
也。わ。り。世。の。名。海。内。小。能。一。と。名。甲。斐。小。能。事。事。の  
紙。神。一。は。昔。小。甲。斐。徳。本。と。呼。び。や。な。り。と。結。乃  
某。の。價。り。わ。り。ま。十八。錢。と。定。め。り。と。あ。り。お。付。乞。士。の



病ありて兼て色（一）十八歳有也と云ふ事  
 言ふれは汝志業以飲事何ん命なり死ね  
 死ねといひもあつて或時高貴の湯方病  
 あつて居りしは湯薬調製（二）も典薬の令  
 治すありし何ん事なり湯病日ありし平  
 愈しむも厚く賞と賜（三）なりし何ん事なり  
 十八歳のはより（四）是湯くまの事  
（一）湯ありし事なり  
（二）湯ありし事なり  
（三）湯ありし事なり  
（四）湯ありし事なり  
 日経坊東堀めて終りて墳墓あり碑面題（五）

乾室徳本庵主と見ゆその持てふ金とて今も東  
 堀乃は子業氏も記ありて遠き國までも傳  
 つて醫志あり人なる事ありて湯ありて終り  
 事の傳すこと徳本の著せし梅花無盡藏と  
 しつものあり先子冷齋湯くあはれ紙巻し仲  
 景れ規矩やうなり宋の張子知よはきと書しや  
 といふ療術の奇なりとあはれそのいひ極も世  
 の人よあはれと書しと極ありし事ありと  
 今も口碑も存まはるすなりと近世時人  
 傳及び醫家小傳等にも見ゆ



仙人床

木曾上松宿寐覺の里々土俗傳々浦嶋太郎の  
伝も亦地をゆきゆきと帰るるらんといふ  
愚者乃伝多きゆりゆり浦嶋事ハ既ニ俗  
説辨多ふんをたれは浦嶋を以て帰翁と私  
小思ふよと喜翁ふあつとや雍州府志ニ寛正  
年中武藏國河越有道導諱三喜者自號範翁又稱  
支山人及中年入大明留居十二年學東垣丹溪之  
術遂携醫家之方書歸本朝救療蒼生云云此人の  
亂世を厭ひて山の深山中入りて終老す

れも知る事なく今もその傳を聞きしる  
事とらゆかぬ一述小訓してらんゆりとなせり  
らん於湯舟沃小吉田兼好の宅趾あり兼好の書  
に於て  
遺吉野拾  
遺兼好と傳々るる屋鋪とあり遂  
小傳々猿屋鋪とありゆりや  
君山木曾  
志略小再按さるる三喜翁と土人推々神仙と  
ありあはれ假稱して浦嶋とて呼らるる  
り此兩人伝々るるありやゆりや  
らり  
浦嶋ハ雄略帝の討りんゆり日本紀續日本紀扶桑略  
紀贈餘雜錄等子入ゆり舟後の國網野乃社と浦嶋と  
祭とありゆり怪談故事と目んゆり  
らり木曾小ゆりあり



鷓鴣

むしーつるま乃びあや貝沼の里入り一人の武吏  
あうてつらむ鷓鴣一法のひ居るふとらん号とく  
その雄も成射たより程強く強ふまて嶋もと捕  
多れよあれつらむやまーせんふたふた鳩鳥の首  
やうらつて翼乃中ふつたてあ繁鷓鴣の必あく  
つらふものありと貝原翁の強ふもんゆ彼武夫乞  
とらんくたう感悟一弓矢捨てく強くなれり後  
ふ一寺と遠まは今乃鷓鴣山東光寺乞ゆり

れとらうと漢名鷓鴣ゆふと中野ゆくと住  
古より鷓鴣の字とらんひあれあやう 嶋鳥の

清く歌とく日暮ゆきとらんさきひー貝沼のま  
菰うくれ乃を一の部とる強やとひ強つら著聞  
集のみちれく乃ふあゆめまはくあーかうの清  
奇よ日暮ゆきとらん強飛ーその強ゆめまはれま  
菰かられ乃むとる強そく強とらんと剽竊と  
あゆり歌の強も強と抽ー沙石集おまひ故事  
因縁集等ふ強と強とらんとあゆの強ゆ事下  
母と近江國をゆゆも日暮とらんた々英年集  
とゆ強とまはし貝沼の号ゆとらんと

大蛇



天正の比大なる村あり大蛇伝ふるより其の危き事  
多遠乃藩士小井深九郎兵衛少とてふ人あり打  
平魚とて大刀掲げくるゆきとあり叢の中ふ  
眠居りて人あり首とうち落しけぬ事あるに  
や活一洞の動く響地震のこゝ其首を掲げり  
井深と目うけく追来る井深を小沢の邊へ逃  
行しう今多のうせと踏ぬり蛇とひききて切倒  
し其身も世とてり後蛇は多あり漸くはり快復  
志けりて新若山集より人きり今按てり  
利本村小大蛇洞や習つる比あり大なる村あり

新ら大蛇乃伝ふるは蛇ふやとせんまゝ小平内  
記り天龍川を大蛇切し事小平物語より人の  
今も稀や大蛇出づるのありて後去寫  
新ら小河南の里人深山より大蛇をせんて逃  
るゝ若あり我任別り山より山乃海を好  
むるの非常の物も伝ふる見えたりややむそ  
ろきとてり

二婦人

元文の比本郷乃里ふとよ電とて二人の女あり  
多好いふ物あり人の好むひもん亭よりむ物あり







も士君子の死に男子を人物のうらやま

礼の事美濃信濃の戦いである事、武門の事、飯田の事、昭信の事、今や

華のりあ日印の昇平の清代はあらう

邊鄙乃猶き婦人よりうらやまの事

とひり往來の人々茶酒を賣く業の

たりやぬん

木乃伊

新野邨よいはまのはまの死に人乃朽敗をあらわ

つゝその姓名履歴を知らぬ人なりた

呼事なり是の紙は弘智法印の紙なり

東奥紀行及少紙奇談 等々

て此人と城の事う棺の事なり

ぬるふ尸をうら乾枯しくその事あり

たりきりりやむ姓名を知らぬ人なり

う五百年の事なり朽敗せたり

もゆり事なりとありぬん

乃書よちうは美事なり

今もその里の泉滋

南留別志あり

う五百年の事なり

もゆり事なり

乃書よちうは美事なり

今もその里の泉滋

南留別志あり



西京雜記  
魏王子且  
渠家無棺  
柳但有石  
折廣六尺  
長一丈石  
屏風牀下  
悉是雲母  
牀上兩屍  
一男一女  
皆年二十  
許俱東首  
裸卧顏色  
如生人又  
幽王家百  
餘屍縱橫  
枕藉皆不  
朽唯一男  
子餘皆女  
子

しるふに物即ち好むらん其人数萬人  
のうちめられたるものもあふものあり  
しるふに必す國山のふたはれりしや職方外紀  
に歐邏巴乃一地に死者と山に移さるる尸子  
載朽とて人々采覽異言小卧兒狼徳の塊と雖も  
室もく人物のせせさありし蘭人ある年を  
の國軍の衣糧屋具と儲けしりしに人  
も備ふりし聖のるりてんは坐とる若  
ら坐し卧す人々好むるはく乳哺の如

皇朝類苑  
引倦遊雜  
録曰華嶽  
張起谷岩  
石下有僵  
尸齒鬚皆  
完  
関氏著  
世宗發墳  
志小上州  
茂呂村の  
石室の中  
尸あり  
て俯伏を  
あうし  
東奥紀行  
越後津  
川玉泉寺  
淳海上人

くやあうしるんこれ等の藪比その木乃伊  
わりの少くは越後のしるふに國中  
たあうしるの者もあつたは蚕の中  
小疆蚕の生る家たあうしる萬國新話よりの  
説くは行力少くありしは古拙し其毛雜  
話及び采覽異言よ木乃伊熱喝少て人比焦枯  
志る好むしる蘭人其言語と後ら好む  
唐僧義好しるもの死しる百年と  
和漢太平廣記しるもの  
春山  
伊那の郡福をとりし里小産る席やとる農あり



の尸も百  
余の積敗  
せすとい  
白

家富貴を乞ふにや目の所著一々家或時却方より  
其の富貴を乞ふに喜ぶやと云ふ事なきは信じて居せし  
よしては海を渡りてのりて其の事なり何れも信じて  
しに其の事なり何れも信じて居るに其の事ありて  
湯水とての咽とての事なり何れも信じて居るに其の事ありて  
に其の事なり何れも信じて居るに其の事ありて  
面せしやと云ふ事なり何れも信じて居るに其の事ありて  
括氣とての事なり何れも信じて居るに其の事ありて  
て其の事なり何れも信じて居るに其の事ありて  
ハ誠にして其の世に其の事なり何れも信じて居るに其の事ありて

者少終中納之教の事ありて其の事ありて  
洪武とての事なり何れも信じて居るに其の事ありて  
ふありて其の事なり何れも信じて居るに其の事ありて  
る事なり何れも信じて居るに其の事ありて  
給の事なり何れも信じて居るに其の事ありて  
色実なり何れも信じて居るに其の事ありて  
一消息なき事なり何れも信じて居るに其の事ありて  
ちたなり何れも信じて居るに其の事ありて  
言井ふ事なり何れも信じて居るに其の事ありて  
ひの事なり何れも信じて居るに其の事ありて



よあやしくも若て清りともく本々その場今福島の  
河梨

### 小松氏墓

入の首字良助小松氏の墓あり土人傳く惟盛  
乃墓より平家物語より惟盛は潜行して熊野浦小  
引り海に没入せりや見えたり國史略小曰惟盛海  
に没入せりありありあす晦跡して伊勢國安野郡に  
潜匿し承元四年二月念八日五十三歳と病没せり邑  
中其子孫存せり者二十一家隸属の給二百五十  
餘戸ありやゆんけりとい惟盛海に没入せりあり

ら乃さねて其村にありともありは今も墓の

存せりともあり 入谷のうちに小松氏墓あり 建福寺に僧

文覺より穿てる池とあり新著聞集小蓮華寺

小文覺の墓にありとも 白紙に文覺ハ實朝公乃附

惟盛乃子六代と来て反せり 武隠岐に流しぬき

をりとも 遺跡の存せりともあり 六代

乃命城を清し 事もいふあり 惟盛と依

ち いひ伝ふあり 源為朝自

殺せり その保元物語にあり 琉球へ渡り

てその子孫乃人 之地を有せり

南嶋志琉球事畧  
三國通覽等より



此の地朝に系系秀り本号小松也 木曾志略 源義

経う轉朝して道々の路 鎌倉實記のい ねんせ先 蝦夷志小のい

覺のしひら新考ふる山室邨遠照寺の持人

ふ古傳又々康暦二年六月小松四郎源盛義とん

つらそのはは地ふ少松氏ありて今良邨乃墓も

そねもれ人なる命一氏の同一記のふ惟盛と誤

つをを移りてあや様約のて一上古乃事存する

かあてくともさるやかく實小大史氏の嘆とて

い傳りてい

信濃寺の巻之下終

附録

王墓 ねんせあり土人結々 敏達天皇の皇子形勝

親王と蒸なるも又ねんせといふ日本紀及び皇胤紹運

純名もねんせあり頼勝親王といふ中らんをねんせ

比治塚のちとねんせとねんせといふ事なるのをねんせ

まへんといふのまへんまへんといふ殉死のまへんふはるる

うのめ一植輪なるべ一は河さう本下地屋を天皇

後后洞のちとねんせあり一塚名もあねんせとねんせ

湯方と葬りてせよあまもや河さいもさるるの湯方

附録











善事繼母矢野氏及義父母未有踈意是以  
 皆視之猶所生合族感賞他人亦聞其死莫  
 不哀慟其祖淡齋翁以善俳諧歌聞元鑑亦  
 好之元恒聞其疾病走往視之實危篤也請  
 題一句額而揮毫蓋其舊題得意句也舍筆  
 即瞑悲哉已葬元恒左祖右還其墓曰嗚呼  
 汝之不壽命也松本汝祖先墳墓所在汝今  
 死首其丘其安之文政十二年二月高遠教  
 授中郎元恒識



